

ひじりの声 上田 藤市郎

年頭に当たり藤樹先生の眼から見た警世の言を発することとする。昨今の日米「政治屋」の醜い言動は、嘘をつく、嘘が露見すると言いつく重ね、部下に付度させて、資料の改竄、記録廃棄、最後は部下の罪にしてリーダーとしての責任はとらない。これは、社会全体に取り返しつかない悪影響をもたらした。言葉というものは、行動の裏付けがあつて初めて真価をもつ。悪事を覆つたために言葉が使われると、言葉は重みを失い人々に不信を抱かせる。「誠」という字は、「自分のことばを固く守つてたがえない」の意味がある。政治屋が言葉の力を衰えさせてしまったのである。私利私欲や保身のためには、言葉は道具であり、嘘であれ、何であれ、言い直したり言っていないと言えは済むことだとしてしまった。嘘をつく本人が、強く自覚しているのだが、意思力が弱く勇気がないので「良知」とは真逆の私欲に負けてしまうのである。政治家の常套句「誠実に」「真摯に受け止め」は、聴くたびにしらけ切ったことばになつてしまった。この裸の王様を諷めることができない党や仲間が、これに加担している。年末の漢字なんぞ無視して、本来言葉がもつ値打ち重み、その証拠となる自らの行動の自覚こそ、「致良知」「知行合一」の原点である。今年に言語に誠実性を復活させる年にしたい。

藤樹人間学塾： 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の中で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

高島藤樹会の活動

九月十九日(土)午後、安曇川公民館で第百八回の塾を開きました。参加者は京都、大津、近江八幡からを含め十名でした。

最初に「ウイズコロナ時代の幸せ」について、幸福学研究の第一人者、前野隆司教授の「幸せになるためには四つの因子がある」という話を紹介しました。

さて、今回は『中庸解』第二十章の続きです。「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。・・・」。

大意について、中庸解を图示して説明しました。「誠は天の道である。すなわち天の命が私たちの身体に宿っているものである。聖人は心がきれいなので、それをそのまま得ることができるが、賢人等は欲などの心の汚れがあるので、それを取り除く工夫修養をして誠に至る努力を続けなければならない」。そして、

吉田松陰や鈴木大拙が如何に「誠」の人であつたかという話を、資料を基にしました。

参加者からは「幸せの因子という考え方にはとても共感した」、「従容とした生き方をしたい」、「コロナ禍の中、医療従事者に感謝するコンサートを開き喜んでいただきたい。学んだことは実践していきたい」、「皆で勉強すると場の力で学びが深くなる」、「鈴木大拙の年をとる意味(欲が少なくなるので内面を省察できる)」という考えに感銘を受けた」等の意見を頂きました。

十月三日(土)午後、第百九回の藤樹人間学塾を開きました。

今回も『中庸解』第二十章の続きです。「博くこれを学び、詳らかにこれを問い、慎んでこれを想い、明らかにこれを弁じ、篤くこれを行



う。・・・」。大意について次の様に説明しました。「多く見て、多く聞いて、心の本体を覚知しようとする、詳細に我が身に照らして惑いを除き、妄想・雑念を発せず、自分の頭で真剣に考え、公私、義利、是非、真妄等をしっかり区別して、深く信じて、達成するまで手を止めずどこまでも努力する」。

『中庸解』の中に「性即理」の論理があります。・・・理を媒介として万物が生成され継承されるのであれば理は遺伝子と似た存在のようにも思えます。そこで遺伝子工学の第一人者、村上和雄氏の言葉を紹介しました。「プラス発想をすれば遺伝子が目覚める。宇宙飛行を体験すると神仏の存在を想わずにはいられない(これは藤樹の「孝」の思想に近い)。ヒトは本来助け合う生き物として進化してきた」。

参加者からは「宇宙に思いを馳せる生き方の言葉は歌謡曲にたくさん使われている・・・(それだけ人の心を打つのですね)」等のご意見を頂きました。

十一月三日(土)、第百十回藤樹人間学塾を開きました。参加者は八人でした。

今回は『中庸解』第二十章の最終節です。「人一たびこれをよくすれば、己はこれを百たびし・・・」。

大意について次の様に説明しました。「心の本体をしっかりと理解して、深く信じて真の志を立て、他人の百